

島根県出雲地方の社日祭祀

梅原達治

はじめに

島根県内に社日塔のあることは知られており、地神信仰についても多くの記載がある。しかし、島根県を全県的に見たものは筆者の管見にはない。今回、島根県内で調査をする機会に恵まれたので、先学の成果に僅かではあるが筆者の観察と考察を加えた小論を提出する次第である。

資料として付した個々の諸資料に見られる諸事象を個々の記載のあるものを関連した事象として眺めるとき、あるいは新しい視界が広がる可能性もあるのではないかと言う期待がある。たとえば、島根県内に見られる東西の社日祭祀の相違（島田、一九二―一九三頁）（資料）は、単に至る所に偶発的に見られる諸事象として取り扱わずに、全国的に共通する法則に従ったものではないか、或は、共通する同一の影響を受けたものかと言うような点からの見直しを試みようと言うのが本稿の主旨である。

筆者は徳島県や千葉県印旛地方の社日祭祀の調査の結果から、島根県内の社日祭祀はその地の権力者、つまり、近世末

出雲を領有した松江藩主の命令によって行われるようになったものであろうと言う予見をもっていた。しかし、このことを支持する証拠を見出すことは出来なかった。また、それを否定すると思われる事項も見られなかったわけではないが、藩命により社日祭祀が行われるようになったとの仮説に立ち、官設の祭祀の土俗化という過程が見られるかどうかと言うことを検定することを目的とした。

なお、これまで度々取り上げてきたが、本稿で醮儀型祭祀と呼ぶものは大江匡弼著『春秋社日醮儀』（一七八一序、『醮儀』と記す）に従ったと想定されるものを指す。本稿においては醮儀型の塔を醮儀塔と呼ぶ。他の例もこれに倣うものとする。

一 地理的考察

島根県における社日祭祀の個々の状況はそれぞれ資料を参照されたい。言うまでもなく、島根県は中国地方において日本海側、即ち山陰地方にあり、西は山口県、東は鳥取県に接している。山陰地方は山陽地方と脊梁山脈で接しており、自然環境においては異なるところも多からうが、陰陽間には多くの街道が横断しており、人物、物産のみならず、思想や習俗の交流も盛んであったと思われる、歴史的、社会的にはきわめて密接な関係を維持していたと言うことはできよう。このような観点から中国地方五県の社日祭祀の状況を比較することは重要であり、また、現実にもそのような考察もなされている。

その概要を述べると、中国地方には岡山県から広島県東部、さらに島根県東部に社日―地神祭祀が、島根県西部から山口県にかけて盲僧の地神祭祀が見られる。（資料A、B）地神盲僧は島根県西部―山口県から九州にかけて信仰圏を形成していたように思われるが、詳細については不明である。島根県から岡山、広島県両県にまたがる社日―地神信仰は必ずし

も均質的ではないようである。この点についてもある程度分析ができたと思われる。

なお、山陽―山陰間の交流については、別稿でとりあげた。(梅原七)

島根県は出雲、石見、隠岐の三国であり、そのなかに民俗上おおきな違いがあるが、それは質的な違いではなくあくまでも量的な違いであると言う。さらに、細分する場合、中国地方は(1)隠岐、島根半島、伯耆、美作以東、(2)石東と出雲の大部分と備中、(3)石見の大部分と安芸・備後、(4)石見の鹿足郡以西と周防・長門というふうにおおむね四つの地区に分類されるという。(石塚、二二―二三頁)しかし、この分類はあくまでも民俗全般の分類であり、個々の習俗については別の要因が働けばある項目の習俗の分布はそれに合致しないこともありえよう。

まず第一に取り上げる点は、県内における東西の相違である。言うまでもなく、県の西部は石見国であり、東部は出雲国に属する。石見地方に見られる社日―地神祭祀はすでに指摘されているように、山口県から九州にかけて見られる地神盲僧の係わる祭祀習俗で、必ずしも社日を中心に行われるものではない。これと対照的に出雲国内の社日習俗は明確に社日を中心とし、農耕儀礼として取り扱われ、土地の神、例えば、屋敷神などの性格は見られない。そして、この祭祀はこれまで取り扱ってきた醺儀型である。さらに、その分布は単に県の東部と言うような漠然としたものではなく、おおよそ、出雲国内に限られているようである。醺儀型社日祭祀の特徴は、春秋の社日にその年の豊作を祈念し感謝することとその側面に天照大神をはじめとする特定の五神号を刻んだ五角柱の石塔の造立にあると言うことができる。そうして、その分布が特定の範囲に限定されることが多いと言うこともできよう。島根県内の調査において最も意を注いだ点は、その分布の範囲と石塔の造立年代であった。

すでに述べたように、醺儀型の社日祭祀は『醺儀』の教義に沿った形式にしたがっている。このことは人と人との接触がなくても、その内容の伝播の可能性の存在を示唆するものである。他の条件を無視すれば、書籍の流通範囲内であれば、

全国何れの地域でもその教義は伝播しうることである。すなわち、当時、つまり、一七八一年以降、識字階層の人物（通常、書籍に親しんでいる人物）の存在によって教義の受容は可能となり、極端な表現をするならば、一七八一年以降、時間と空間を超越して、その教義は受容可能となったと言うことができよう。（写真一）たとえば、全県的な調査に基づくと思われる兵庫県についての記載によれば、全県で社日祭祀の盛んな淡路島を除いた県内に二箇所を除いて社日祭祀が行われたように考えられる。明治以降の入植民の造塔による醺儀塔の多く見られる北海道を除いても、社日信仰の盛んな相模―武蔵地方の各地に醺儀塔が散在している。この伝播形式のほかにまとまった分布も見られる。醺儀型祭祀がもっと盛んに見られるのは徳島県とそれに隣接する兵庫県の淡路島である。ここは旧徳島藩領内で時の藩主治昭の一七九〇年ころの命令によって普及したと言われ、その性質も均質的である。また、これと同様な性格によるものとして、ほぼ同時代藩主正順の命令があったとされる千葉県印旛郡内佐倉藩領のものを挙げるべきであろう。



写真1 醺儀型社日塔 神奈川県秦野市
鶴巻 社日塔（地神塔）としてこの形式のものはここでは孤立して見られる。

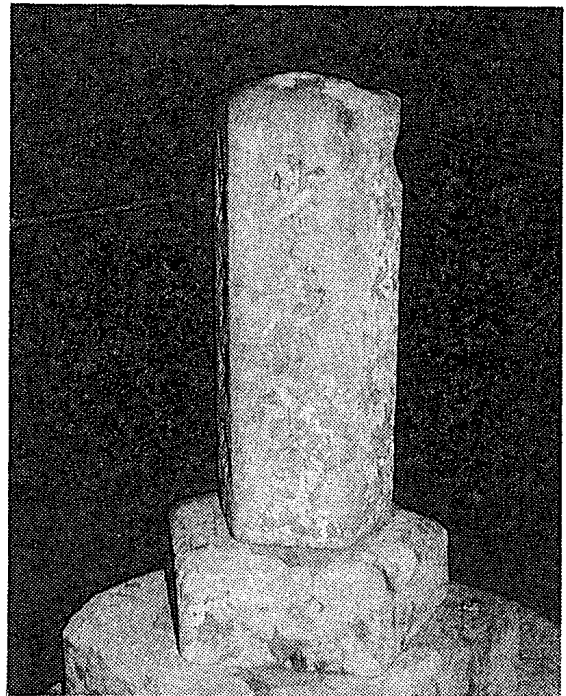


写真2 醺儀型社日塔 島根県能義郡広
瀬町 島根県出雲地方全般に見られる。

しかし、後者の分布もその端緒は前者の分布によると言えよう。つまり、その伝播の源泉と言うべき第一次中心が京の書籍の発売元であり、それがその流通経路により各地に普及し、そのある地点が第二次中心となり、そこを中心として教義がある範囲内に普及したと解することができよう。

また、南北関係、つまり、山陽側との関係である。岡山県内にはひろく醺儀塔が存在するとの記載も見られるが、(島村、二〇四頁)近年の記載によれば、醺儀塔よりは自然石に「地神」と刻んだものの方がより普遍的であるとの印象をうけるが必ずしも均質的に分布しているとは思われない。(土居、他、一四七頁)また、広島県内の社日祭祀も県内に均質的に分布しているとはいえない。その分布は岡山県に接する備後地方に見られるようである。この備後地方の分布が岡山県西部の備中からの伝播によるものか、あるいは、福山藩などが政治的な影響力を行使した結果であるのか、早急には断定することは困難である。別稿で触れるが、出雲国に接する広島県比婆郡高野町の五基の醺儀塔以外の既知の備北の地神塔の紀年銘のすべては明治以降のものであり、また「地神」などの文字塔であり、醺儀塔は見られない。(黒田、一七―三〇頁)そのような点から、島根県西部、出雲国内の醺儀塔の造塔について、岡山、広島両県の地神―社日塔の直接の影響を考慮する必要は少ないと考えられる。

島根県西部の社日信仰の分布範囲はほぼ松江藩(その支藩を含む)の領内と一致する。藩令などから具体的な記載を見出すことはできなかったが、徳島、佐倉両藩の場合と類似した現象とするのが現在ではもっとも蓋然性の高い見方と思われる。また、文献上、社日塔の造立の契機や年代についての記載は見られなかった。さらに、調査した石塔に紀年銘は見られなかった。しかし、安来市社日公園の醺儀塔を除き近年造立されたものは見られず、その習俗の古さが推定された。

地神の文字の意味するものは土地の神である。土地は人間が住む場所であり、また穀物を生ずる場所でもある。社日祭祀の意味する土地は人々が耕作し作物を収穫する対照であり、社日はその土地を司る神、社を祀る日なのである。石見で

はその土地の神は地主様または地神（じしん）といわれる。石見の日原、柿木、吉賀地方では、土地の神であると同時に、両手に穀物の種を持っている農業神として豊作を願う神である。この地方の地神祭祀は山口県から九州に続く地神盲僧文化圏に属すると思われる。日原では一月八日などが地神の祭日で座頭は四季の土用にも各家を回る。

これに対して、出雲隠岐の地主さんは土地の神であり、屋敷の守護神と言う性格が強く地神と分化していると言われ、地神の祭祀は春秋の社日に行われる。（石塚、一九二頁）

島根県内の醮儀塔の存在は旧出雲国内に限られているようである。そして、その範囲内では特に地域的な変倚は見られない。このように限定された地域に均質的な特徴が見られるということは、その地域に同一の要因が働いたことを示していると言えよう。通時的資料から見て、その要因が幕末に働いたと考えれば、当時この範囲に均一的の影響力を及ぼせる機関は松江藩がまず考えられる。これは徳島藩および佐倉両藩領の場合からの類推による。現在知る限りでは、出雲国に隣接する地域では、広島県比婆郡高野町に五基の醮儀塔があるだけである。このことについては別稿に譲りたい。（梅原達治 七）

島根県内の宗教の宗旨は一様ではない。石見の極西部と出雲の東部以外の大部分は浄土真宗であり、隠岐の島前は浄土宗や黒住教で島後は大社教が強い勢力を持つ。このことは風習の存在に大きな影響を及ぼしている。つまり、禅宗は比較的豊かな行事を温存しているのに対して真宗の厳しい戒律は在来の信仰や行事を消滅させる役割を果たした。（酒井、一六三頁）このように、出雲国内もその民俗に強い影響を与えた宗旨の違いがある。このような状況下で均質的な習俗が見られるということは、この基盤にある勢力を越える、あるいは、少なくともそれに匹敵する要因がなければなるまい。さらに、醮儀塔が一七九〇年以後に造立されたとすれば、それだけの影響を与える力は藩しか考えられない。藩の指令としては些細な事柄に過ぎない醮儀塔の造立も、もし、これだけの力が何者かによって出雲藩領内全般にわたって行使されたとする

ば、藩にとって見逃すことは出来なかったに違いない。そのようなことを藩当局が看過しえなかったと思われる。勿論、藩の指令があったとすれば、そのことも、当然記録として残されているものと考えられるが、今回の調査ではそれに類するものは見出すことはできなかった。

二 歴史的考察

本稿の目的の一つが近世末の封建領主が領民の祭祀に及ぼした影響の検討にある。出雲は毛利氏支配後、一六〇〇年に家康は出雲、隠岐を堀尾吉晴に当てがった。(二四万石)吉晴は富田(現・能義郡広瀬町富田)に入城したが、一六一一年松江城を造りそこに移った。一六三四年、堀尾氏は三代後嗣子を欠き断絶、それを京極忠高が受けたが、忠高も嗣子なく、その死により一六三八年家康の孫に当たる松平直政が松本から松江に入った。その後、一〇代にわたり親藩松平氏が出雲国一国を知行するとともに、天領とされた隠岐をも預かった。二代目以降その二子、三子のため広瀬(家門小藩)と母里(家門極小藩)に支藩を設け廃藩置県に及んでいる。一七〇一年より一七〇四年には藩主綱近の弟近憲が松江藩内の新田に松江新田藩を立藩したこともある。(村磯、四〇四―四〇五頁)

島根県内で観察した社日塔の数は少なかったが、再建したものを除き紀年銘を見ることはできなかった。また史料でそれを示すものも少なかった。また、松江藩の藩令のような記載も見られなかった。社日祭祀が何時ころから行われるようになったか、明確な記載が見られないことは、この導入が近年のものではないことを示していると言えよう。社日社の勧請について具体的な年代を示した記載はないわけではない。第一に挙げられるのは『雲陽誌』の八束郡二子、地神社の記載である。(蘆田、一〇六頁)これは、いわゆる、農民が社日に五穀豊穰を祈念し感謝するというものとの関連は不明であり、その年代(一五一〇)が他地方の地神―社日塔の造立年代と掛け離れている点からも、醮儀塔造立を中心とする社日

祭祀の発生の考察からは一応除外しても差し支えあるまい。

それに次ぐものは、一七六七年、(現・松江市八束郡西津田)の山代神社の境内社に地神社の記載である。(津田・他、五二四頁)醺儀塔が同年に造立されたと考えるのが最も率直な読み方であろう。千葉県佐倉市下志津大口にある社日社、五社神社は一七五二年に創立されたという記載がある。(千葉県、四七八頁)筆者はこれについて、石塔の造立には祭祀の前史があるのではないかとの作業仮説を立てている。(梅原三、五五頁、六四頁)その後これを検討する機会を失しているが、山代神社の場合、特定の状況を考える材料を見出してはいない。醺型塔の造立年代としては適当ではないが、この記録があることを記しておく。

梅原達治 さらに大原郡加茂町の『加茂町史考』は加茂の社日神社について「祭神天照大神大穴持命小彦名命埴安命倉稲魂命であって、即ち五穀の神である。文化年中勧請社殿は石祠」とし、同町延野の社日神社について「祭神五穀神、正保三年勧請と聞え社殿はない」と記している。(中村、一五四頁、一六七頁)大穴持命は大己貴命の別神号であり、埴安命は埴安媛命の崩れた形であると解するならば、前者の五穀神は醺儀型であり、これが醺儀塔を指す可能性は大きいと見なすことに大きな抵抗はない。一方、後者延野の社日神社の祭神が五穀神であることは、前者の記載と比較して醺儀五神を奉祭していると考えることができようが、社殿なしということはどのような意味があるのか不明である。また、その勧請年代の一六四六年が正確であるとするならば、これが醺儀型の社日社とは考えられない。これに対して加茂の社日社の一八〇四年(一八一八年という年代は他地方の醺儀型社日塔の造立年代に平行しており、出雲国内の醺儀塔の造立年代の推定の参考になりうるものと考えられる。

また、八束郡島根町には社日には禁忌を求める伝説が知られているが、その年代が幕末とされていることも、その草創期を示唆するものかも知れない。

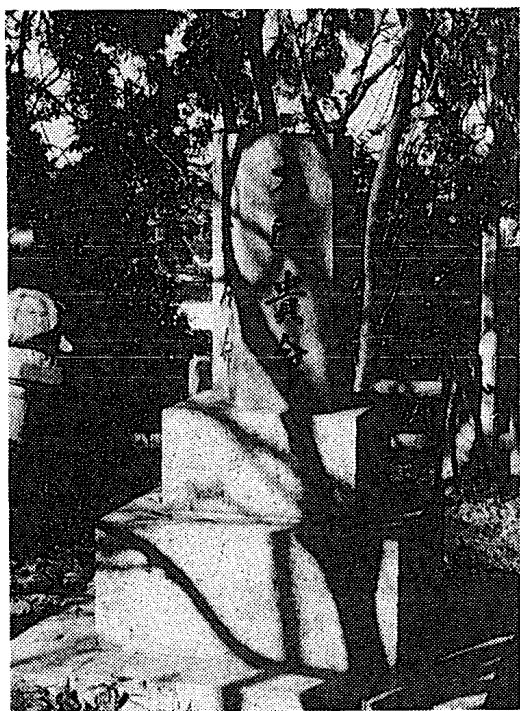


写真3 島根県安来市社日山

『布志名誌』は八束郡玉湯村布志名村の氏神社稻荷神社の境内社、社日社（祠）を農業神であり、民間信仰のものとして
いるが、この起源を一七八八年の天明の大飢饉に置いている。（布志名、一二二―一二三頁）資料に挙げておく。（資料）
当時、農民と統治者との相克は珍しいことではない。このとき、統治者はただあらゆる方途を講じたと思われるが、そ
のなかに超自然的な手段が含まれることもあったようである。

仁多郡横田町に義民伝六の碑がある。これには天明の大飢饉にまつわる一つの伝説が残されている。この伝説によれば
一七八四年の飢饉に際して百姓伝六は先頭にたつて上納米の減少運動に奔走し、松江藩に嘆願した。しかし、松江藩は首
謀者一〇名は捕らえられ、伝六を含む四名は打ち首、六名は追放された。処刑の日、伝六は裸馬に乗せられ、村中を引き
回され現在石碑のある場所で処刑されたが、青竹で晒された首はいくら直しても翌日は松江藩の方を向いたと言われてい
る。（酒井、三七―三八頁）

この伝説に興味もたれるのは、農民と直接の統治者である藩との
関係である。生活を維持するための農民運動の指導者が農民のために
処刑された場合、義民として尊敬されその霊は農民を保護するとする
思想がわが国に見られる。（宮田）

現在、島根県内では、社日祭祀はほとんど過去のものとなっている
との感を強くするが、安来市に伝わる安来節の冒頭の詩句は生きている。
つまり、「安来千軒名の出た処、社日桜に十神山」は現在でも入口
に膾炙する歌詩が何時成立したものか不明であるが、この詩を引用し
て藩政期の安来の繁栄ぶりをうかがうものとしたものもある。（島根

県、七八〇頁)

後 記

本研究は昭和六十二年度学校法人札幌大学研究助成費による。

年表

一一一七	永久五	関白藤原忠実、新造鴨院第に地神供を行う（八月一二日）
一四二三	応永三〇	夜召米一座頭令引。地心経未聴聞之間。祈祷旁語之。檀紙十。茶等賜之。（八月五日）
一五一〇	永世七	八束郡八束町（大根島）二子地神社（祭神 瓊々杵尊）造立棟札（蘆田、一〇六頁）
一六〇〇	慶長五	松平氏 松江藩を受ける
一六四〇	寛永一七	宗門改易創置
一六四六	正保三	大東郡加茂町延野社日神社（祭神五穀神）勧請と言う（町、一六七頁）
一六八二	天和二	岸崎左久治『田法記』
一七五二	宝暦二	千葉県佐倉市下志津五社神社創立
一七六七	明和四	八束郡西津田、（現・松江市）社日神社（祭神、天照大神。大己貴命、少彦名命、稻倉魂命、垣安姫命）山代神社境内に五穀豊穰家内安全を祈請し石碑を彫り祭る（郷土、524）
一七八一	天明元	『社日醮儀』（序）
一七八二	天明二	この年までに安来、乗相院住職社日山に桜を植える。
一七八四	天明四	伝説 義民伝六（仁田郡大呂村・現・横田町）
一七八八	天明八	解説 飢饉が社日信仰の原因（八束郡玉湯町布志名）
一七九一	寛政三	佐倉藩、堀田正順、惣五郎に徳満院の号を贈る。このころ、藩内に醮儀塔の造立盛ん。藩主の命によると言う。
一八〇四	文化元	大原郡加茂町加茂 社日神社（祭神五穀五神）石祠 勧請
一八一八	文化	松平治郷没
一八一九	文政二	六月九日 伝六たち処刑さる（横田町、三二七頁）
一八七一	明治四	廃藩置県
一八七五	明治八	広田亀治、亀治種を作る

資料

A ざとう 座頭 (大庭 上六七六頁)

地神(じじん) 経を唱え(地神申し)をして歩く盲僧。九州の一円から山口県下にかけて見られるが、その一部が石見の鹿足・美濃郡地方にも及んでいた。もともと座頭とは、盲人の団体である当道の四階級、すなわち検校・別当・勾当・座頭の一つをいうものであったが、およそ室町時代ごろからこれが盲人の代名詞のごとくなり、その職能も種々に分かれてきた。地神祈禱はその最も重要な職務であって、近世には幕府の保護を受け、各地に院を設け、主として天台宗に属して檀家を有するものも少なくなかった。それは明治維新で廃止になったが、その名残がこの地方では最近まで続いていた。彼らは墨染めの衣を身にまとい、風呂敷に琵琶を包んで背負い、杖をたより、一戸一戸檀家を回っては、経を唱え、琵琶をひいて地神さまを拝んだ。回ってくるのは四季の土用であったから、これを土用弾き(ひき)といった。その他、年の初めにも回り、また年末に竈祓(かまばらい)をして歩くこともあった。頼まれて雨ごい祈禱をすることもあり、大勢集まって村祈禱としての地神供養をすることもあった。津和野町には第二次大戦後まで院が残っていた。↓地神申し

B じじんもうし 地神申し (大庭 上七二一―七二三頁)

年のはじめに地神さまに豊穰を祈願する行事で西石見地方に見られる。地神さまは土地の神である。順番に頭屋の家でおこなう。通常、神を祓るものは神職であるが、地神申しの場合は近代でも盲僧であった。当日は各家の主人は農箸(のうばし)と米四合を持って頭屋へ集まる。農箸はワラをきれいにそぐって先端を切ったもので、田植えのとき苗を束ねる。盲僧は床の間に「南無堅牢地神尊(なむけんろうじじんそん)」の軸をかけ、大きな幣を立て、農箸と幣と榊とを各戸三本ずつならべ、米一升と鏡餅一重ねを供えて、琵琶をかき鳴らし、地神経をよんで祭りをする。終わると米をつまんで投げ

あげ、手に受けてその数によって年の豊凶を占い、ことしもよい年だという。あとは皆で夜遅くまで飲む。幣と神は持つて帰って苗代と畑に立て、農箸は田植えのとき使用する。近年盲僧がいなくなってからは神職を呼んでするようになった。
↓座頭

C シャにち 社日 (井塚 上八二四頁)

春分・秋分に最も近い戌の日。古来土の神の祭日とされ、土を動かすことを忌んだ。もともと古代中国に始まる信仰であるが、わが国にはいつて田の神信仰と一体になり、農民の間に広くゆきわたった。昔は部落ごとに社日講があつて、天照大神ほか五柱の神名を刻んだ石柱の社日を設け、この日になると百姓は一日仕事を休んでこれに参り、なおらいをした。能義郡広瀬町の奥部では春の社日には種粃俵に水をかけ、秋の社日には穂掛(ほかけ)けをすることになっていた。

D 地神と社日講(島根県) (島田 一二九―一九二頁)

石見では地主様または地神(じしん)という。出雲や隠岐の地主さんは土地の神・屋敷の守護神という性格が強いので別項でふれることとし、ここでは地神に限って述べる。石見の日原・柿木・吉賀地方では、土地の神であると同時に、両手に穀物の種を持っている農業神として豊作を願う神である。

地神の祭日は、日原では一月八日とか春の社日のころであり、柿木あたりでは一年の収穫が終わる秋に家毎で行う。春の場合、「地神申し」という儀式は、組の人々が米と農箸(のうばし)を持って宿に集まる。農箸とは田植えのときに苗を束ねる藁のことで、藁をそぐってうらをはねたものである。座頭さん(盲の琵琶法師、モウソウさん)が来て幣を切り、神と農箸を一緒にして祀る。幣と神を二本ずつ貰って帰り、幣は田や畠に立て、農箸は田植えの時に使う。座頭は昔は七

院もあつたが今は二院が現存し、四季の土用毎にも各家を回るといふ。

秋の場合、座頭の訪問を受けた家では、米・砂か泥を入れた茶碗一杯・塩・谷の水・注連縄・カミシバ・幣・オシノ（二四個・閏年は二六個）を準備しておき、座頭が地主様の掛軸を持って訪れると儀式となる。浄めの祓、琵琶にあわせて金光明最勝王経や地神経を唱える。神クジがあり米粒が偶数なら「神はきげんがよい」として儀式は終わるが、奇数のときは偶数になるまでやりなおす。御幣と榊は田や畠に持って行き、五尺二寸の幣串を中心に四隅に三尺二寸の幣串を立て翌春の鋤入れまで立てておく。幣を立てない田畠には供えて置いた砂や泥をまく。これで地主さんの加護があるという。

社日は春分・秋分に近い戊己（つちのえみ）の日で、明治の中頃までは、神床に社日大御神の掛軸を懸け膳をすえて祝い、田や畑の「作り神さん」だから、「社日仕事のあとんどり」といって農耕を休み、山にも入らなかった。春の社日には種粃俵を水にかけ、秋には五穀を供え、いわゆる「穂掛け」をする所もあった。春秋の彼岸の中日と社日が一致した年には、旧土族の家では半紙に墨で「病氣になったとき、下の世話になりませぬように」と書いて簞笥に入れておく風習があった。

広瀬の社日講は三日一八日で、社日社・祠に参詣して講を催し、小豆飯を神さんに供え農家はもとより奉公人も仕事を休んだ。安来市山根町の社日さんの石祠には、天照大神・倉稻魂命・埴安媛命・少彦名命・大己貴命の五神を祀り燈明をあげて拝む。また春の彼岸の社日には亀治市（明治初年に亀治種という稲の品種を発見した広田亀治）が開かれ、農業の豊作を祈る。種子・苗木・農具の市がたち、近郷から農民が集まって賑わう。（↓安来市、八八九頁）（資料）

安来市山根町の社日（図2）と松江市法吉町の社日（図3）あり。

春分、秋分の日を彼岸の中日といい、中日に最も近い前後の戌の日が社日である。この日に土地の神である地神さまをまつる。村の路傍や神社の境内に大きな自然石の「地神」の碑が立っている。紀年銘の一番古いのは江戸時代中期、享保頃のものであり、明治三〇年まで続いている、この頃立てられたものが多い。社日講（地神講）をつくり、地神碑のところ、または回りの当番の当屋に集まって小豆飯の小盆飯といって一杯飯に簡単な御数をつけて祝う程度のものである。（川上郡備中町布賀）秋の社日にはツクリバツオといって稲穂二本を地神さまに供える。正月には大きな注連を張るのが普通であるが、社日にも注連をとり換えている。（備中町平川）

新見市千屋では、地神石は昭和初期に立てたもので地神石のない時代には部落の中央の、今地神石のあるあたりで祭をしていた。春、秋の社日に回り番の当屋が幣を切ってきて酒一升と重箱に一杯料理をいれてみんなで飲む。社日には泥をかもうなといって、土を堀り起こしてはいけないという。笠岡市吉田では、土を堀ることは一切できないうえ、水ごえ（糞尿をうすめた肥）でもコエ（化学肥料）でも施してはいけない。地神さまは嫌って作物にききめがないという。備中町布賀では土の上へオコヨウ（お小用、小便）をしてもいけないといっている。

小田郡美里町の地神と常夜塔（図1）あり

F 地神と社日講（広島県）（藤原、八一頁）

県北地方には、各所に大きな自然石に「地神」とのみ大きく彫ったものが路傍に立っている。祭りは年二回三月と九月に行う。暦にある社日とは三月一四日、九月二四日であるが、東北地方では苗代用の三鍬耕してその年の豊作を地の神に祈った。

豊松村の地神（図6）あり

G 地神信仰 (山口県) (松岡、一六〇―一六二頁)

地神信仰は、伝承性の強い山口県の特徴ある信仰習俗である。地神とは地の神、土地そのものが神であるといわれ、その地の開拓祖先とも概念されている。

七、八軒から一四、五軒の範囲が成員となって講をもち、毎年正月のはじめに、順ぐりの当屋に寄り集まって、地の神に対して前年中の御礼を申すとともに、その年の五穀の豊穡と息災平安を祈念する。これを地神祭り、古くは地神申しといい、旧藩時代の風土注進案によれば、正月・五月・二月・六月、あるいは春秋の二回に小村(部落)ごとに盲僧(座頭坊主とか琵琶をひいて経を読むので琵琶坊主、ぴんぴん坊主ともいう)を招いて地神経を読誦したとあり、ほとんど防長両国に行きわたって行われていたことが知られる。現在、市街地では少なくなっているが、在所では重要な行事になっている。

梅 原 達 治

今は盲僧がいないので、天台や真言宗の僧侶あるいは神官が招かれて祈禱する。祭壇に祀られた小幣(地神幣という)を各戸がうけ、これを屋敷地あるいは豊年の御幣ともいって田畠にも立てる。祭が終わると、仕講組(山口県での近隣地域集団をいう)でのいろいろの申合わせを取決め、かねて用意の飲食を共にするというふうで、几帳面なところでは四土用にも行われる。

H 彼岸・社日 (鳥取県) (坂田、一五二頁)

江府町小江尾では彼岸の中日に井戸替えをしている。名和町の加茂や門前では社日にタナイケ(種もみをつける池)の水替えをしている。社日に土を汚してはならないといったり、畑に出てはならないというところが多い。

I 春の社日（島根県）（酒井、一、一八五―一八六頁）

社日というのは、本来は春分・秋分にもっとも近い前後の戌の日をさす。隠岐郡知夫村古海では「大きな音をさせない」とし八束郡八雲村熊野では「菜畑に入らぬ」とか能義郡広瀬町東比田では「倉のなかの種俵に水をかける」としているが、鹿足郡柿木村法師淵では「トシトコさんは社日に田の水口（みとぐち）へ出て亥の子に帰る」とか「大根畑に入ってはならぬ」といい、同村梶谷でも「トシトコさまは作り神さまだから、三月一七日の社日に神棚に水をあげ、それを種へかけておけば、種はいつ浸（か）してもかまわない」という。これはさきの広瀬町東比田の伝えに通ずるものであろう。

さらに梶谷では「この日から神が田に出られるので、闇夜でも足元だけは明るい」とし、種の余ったものは種（たな）焼き米といって、粃をはぎ、焼米にして神に供えて食べていた。そのような風習は、この地方で刈り初めのころの焼米に照応する。要するに社日は稲作の節目を意味しているのであろう。

三月中旬 春の社日 「大きな音をさせない」などの伝えがある（酒井、二二二頁）

八月中旬 秋の社日 田や畑へ入ってはならぬという禁忌など（酒井、二二二頁）

J 秋の社日（島根県）（酒井、一、二〇〇頁）

たとえば大根島では春同様「土を動かしてはならない」といっており、大原郡大東町海潮では「秋は社日さんが山で調べものをしておられるから山仕事をするとそれだけ後へもどる」といって山へ入らず、仕事を休み、とくに鎌は使わない。これは石見吉賀地方の一〇月九日の山の神の日の伝えに似ている。ここでは山の神に酒とカミシバを供え山へ行かない。「二月九日（春の山の神の日）に山の神が木を植えられたのを、この日調べて歩かれるから、神に出会ったら放られる」と

いうのである。一方、八束郡八雲村熊野では、社日には畑や山へ入らず、田の端に竹の枠を組み、稲穂を一二束刈って掛けることにしている。これらの伝えは、社日さんが農業神や山の神の性格を示しているものといえよう。

K 刈りあげなど（島根県）（酒井、一、一〇二頁）

稲刈りのころになると、その仕事納めを象徴していろいろの風習が残されていた。鹿足郡津和野町吹野をはじめ、石西では稲刈りの一週間ほど前に、一斗分ぐらいだけ刈り取り、焼き米にして先祖に供えた。その焼き米には少し塩を入れ茶をかけて相伴するという。柿木村法師淵では、当り口の青い稲を焼き米にするといっている。同村椋谷では焼き米は大豆の葉を敷いて神へ供えるが、これを作り初めと称している。この風味は独特のよさがあり「焼き米を食べ、新米を食べたから死んでも思い残りが無い」とよくいわれていた。春の社日の焼き米との照応が微妙である。

梅 原 達 治

L 彼岸と社日（岡山県）（鶴藤、一、三四頁）

春分の日を日がの中日といい、中日に最も近い前後の戌（ママ）の日が社日である。笠岡市吉田や大飛島尻替では、墓詣りを彼岸の入り、中日、ミテの三回詣っているが、新見市千屋では中日以外に墓詣りをしている。新見市千屋では彼岸ボタをおうものではないといって、ボタ餅を搗いているが、哲西町生木ではボタ餅、餅、小豆飯、団子などのご馳走をし、これを仏さまに上げる。笠岡市吉田では彼岸のミテに仏さまの弁当としてボタか地オハギを作って墓詣りをしている。社日は地神さまのお祭りの日で土を掘ることはできないうえ、ミズゴエ（糞尿を薄めた肥）も施してはいけない。ミズゴエを施しても地神さまは嫌って作物に利きめがないという。（笠岡市吉田）「知って土を動かせば七代貧乏、知らにゃ一代貧乏させる」と神さんがいったからだという。（哲西町生木）地神石の立っているところでは回り番の当屋が幣を切って供

え、あるいは注連縄を張り、酒一升と重箱へ一杯ほど料理を入れていって飲む。社日講をしているところもある。

M 社日（山口県）（松岡、一三五頁）

社日とは春分・秋分にもっとも近い戌の日を指して節日とされ、以前は社日の三社あるいは五社・七社詣りといっているところがある。この社を順拝し、農事の無事を祈願した。

N 氏神社境内の社日社（祠）（八束郡玉湯町）（布志名、二二三―二二六頁）

農業の神として民間信仰により祀られた祠である。当時（年代不明）布志名に社日講がありこの講中により祀られたのであろう。

徳川時代中期（一七八八）天明の大飢饉に農業は旱害、水害に五年もの間不作続きであったと言う。政府対策がある時代でなし藩主よりの救済対策もなし、それどころか松江藩の政策のため骨までもけられる状態であり、農民は頼りとするは神仏の加護しかなかった時代であるから、必然的に信仰が生れ社日講が生じ、これをたよりに五穀成就を祈願したのであった。

この時代に「社日社」が祀られたと思われるが、社日講記録には「明治三五年改」とあるのでそれまでの記録となるものがない。御祭神は五柱神を祀られている。これについての神名神蹟録をしらべてみることにする。農業専門の神である。

一、天照太神（説明略）

一、倉稻魂命（説明略）

一、大己貴命（説明略）

一、長彦若命

少名彦那命の別名である。(以下説明略)

一、埴安媛命(説明略)

祭日は立春後五回目の戌(つちのえ)の日を春の社日とし、立秋後五回目の戌の日を秋の社日とされている。これは春分秋分ともにこれに最も近い戌の日である。当日は土をいじらない、農機具、鋤、鎌刃等を使わないで農作業は休日となる。そして社日歳として社日に参拝、家内安全、五穀豊穣、家畜安全等を祈願するのであるが、近年は時代の変遷と言うか信仰心の喪失か農作業も平気で行われるようになってきた。

社日の起源について

社日の起源は明確に知ることは出来ないが、中国でもこれに類似したことが漢の時代に始められたとなっている。日本における祭りは地方においてまちまちであり、民間信仰は神道的宗教、修験道よりその起源が発生しているものが多く、これと言いきめてがないのであるが時代としては奈良時代より広く祀られていたと思われる。

社日社の境内に並び祀られている祠がある。天満宮と穀木(カジキ)大明神である。

○ 町の年中行事 (安来市、八七七、八七八頁)

三月

社日講 社日講は、春分近い戌(いぬ)の日に、社日神社にお参りして直会をする。この日は百姓は仕事を休み、土に触れないことにしている。

四月

社日桜 この頃から社日桜の花見客で一ぱいとなり、殊に山一面かがりびをたいた夜桜は全山満員で動けなかった。この頃はかがりびはなくなったが電燈による照明で年一年にぎやかである。

P 農村の年中行事 (安来市、八八九頁)

三月

社日 ひがんを中心として後前先の近いつちのえの日(前をとる場合が多い)社日神社にさんぱいして一日休みをとる。この日は田畑の土をうごかしてはならぬと昔からしてある。あずき飯をたくか、もちをつくかして神に供えて当年の豊作を祈る。荒島の亀治銅像付近で亀治市が開かれ、農具、種子、苗木等が売買されてにぎわいを呈する。

Q 風俗習慣 (甲南大、七六頁)

八束郡八雲村

エ) 社日(シャニチ) 彼岸に近い戌の日は「後でした事が無駄になる」といって一日仕事を休んだ。この日は田の神の日だといひ、苗代作りの前に土を動かさずに物忌みをしたのであろう。

オ) 苗代作りと田植え

カ) 社日 刈り入れ前のやはり彼岸に近い戌の日は秋の社日サンの日である。社日サンの野の祠は五〇〇六〇年前まで各部落に祀られており、部落の見渡せる山の頂上にあった。この日稲を少し刈って社日サンの穂かに穂をかけるのであるが、昔はちょうど穂の出揃う時機にあたるので、無事に結実する事を田の神に祈願したものであろうと思われる。同様な行事を八朔(九月一日)に行う地方は多いが、この村では八朔にはこれを食べると疫病にかからぬといひて八朔桃を食

べた。

郷土誌

五十田神社（松江市古志町）（須藤、五二頁）

境内社 社日神社九寸五分四方。（天照大神・大己貴命・少彦名神・埴夜須毘売神・宇迦之御魂神。）

治 二月（須藤、三十五、三三三頁）

達 一、社日祭

朝牡丹餅 歳徳神其外諸神へ祭り御神酒備

梅

八月

一、社日

朝酌（松江市）（山根・他、四四頁）

一七、社日

春秋二回あつて農神を祭る日で小豆飯を俵口に乘せ幣を立てて祭る。この日は土をうごかさない習わしで「社日仕事の後戻り」といってこの日にした仕事は二度くり返さねばならないというので休養の日に当てられている。

『津田・古志原郷土誌』（津田・他、五二四、五四四頁）

山代神社

境内神社

社日神社 祭神 天照大神、大己貴命、少彦名命、稻倉魂命、垣安姫命

明和四年（一七六七）山代神社境内に五穀豊穰家内安全を祈請し社日神社を石碑に彫りて祭る。

一九、社日

春秋二回あって農神を祭る日で小豆飯を棧俵に乗せ幣を立てて祭る。この日は土を動かさない習わしで、「社日仕事の後戻り」といって、この日にした仕事は二度くり返さねばならないというので休養の日に当てられている。

『八束郡誌』 本篇（奥原、三四二頁）

一、山代神社 式内 郷社 祭日一〇月九日 祭神 山代日子命

境内社 社日神社 祭神 天照大神 外四神

『地誌編輯取調簿』出雲国意宇郡東津田村（松江図書館所蔵コピーによる）

社日壇瘡守稻荷社脇ニアル五穀祖神ヲ祭ル

『川津郷土誌』（河津、六四〇頁）

一九、社日

春秋二回あって農神を祭る日で小豆飯を俵口に寄せ幣を立てて祭る。この日は土をうごかさない習わしで「社日仕事の後戻り」といってこの日にした仕事は二度くり返さねばならないというので休養の日に当てられている。

『島根県秋鹿村誌』下（奥原、二二三頁）

多太神社境内社

社日碑 五角柱来待石 高四尺二寸

右、社日碑、本社南側、大自然岩の上にあり。

梅 原 達 治

『乙立史』（出雲市と佐田町）（乙立、一九頁）

社日 社日は春分、秋分の前後に近い戌巳の日を言う。春の社日には種子を蒔き、秋の社日には穀物を神に供えて感謝祭を行う。支那では社稷の神を祭る。社は土の神、稷は穀物の神である。我が国では天照皇大神 稻倉魂神 少彦名神 大己貴神 埴安媛命の五神を祀る。

此の日に仕事をすれば怪我をするとか、為した仕事の後戻りするとか言って、百姓一般は休業する習慣となっている。乙立では向名、殿川内で祭礼を行う（向名、殿川内は出雲市）

『長浜村誌』 出雲市（長浜村、二〇六頁）

三月

社日 旧二月二七・八日頃、農事を休む日で、この日強いて仕事をすれば社日仕事といって後へ戻るといふ。土をいじってもいけないし、木を植えると枯れるなどともいふ。

『上津村誌』 出雲市（上津村、一七八頁）

三月

社日仕事 社日・社日仕事は後へ戻るといふ、田畑の土をうごかしてはならぬといわれる。
大般若・禪宗で行われる。お寺でおつとめがあり善男善女がお参りする。

九月

社日・春に同じ。

『稗原郷土史』 出雲市（稗原、三三八、三史二頁）

三月

社日祭、春分と秋分の日にも最も近い戌の日を社日といい、休日であった。古くから「社日仕事は後戻りする」といわれ、田畑の土を動かしてはならぬともいい、宮参りして仕事を休んだ。

九月

秋の社日祭・春の彼岸とともに春と同様にまつる。

『平田市史』（平田市、一〇六六頁）

春から夏へ「社日」春分に近い戌の日で、土の神の祭日とされ、この日は土をいじることを忌む。以前は大抵の部落に社日講があり、その折の石柱はいまも残っている。

『久多美村誌』平田市（久多美村、一五四、一五五頁）

【三月】

社日 旧二月二七日、八日頃が社日といって農事は休む、今日一日は「社日仕事は後戻り」といって土仕事は一切せぬ。

【九月】

社日には農事を休む。

梅原達治

八束郡鹿島町

恵曇『郷土研究』（恵曇、一二頁）

九月

其他 秋彼岸、社日

講武『講武村誌』（稲田・他・編、八三、九二頁）

社日 春（三月二三日）秋（九月一九日）二回あり。農事を休む日でこの日仕事をすると後へ戻るといふ。木を植えると枯れるなどという。土の神を敬うまつりである。

諸講（左太神社講、一畑薬師講、社日講、観音講）

諸講として佐多神社講、一畑講、社日講、観音講等があり、社日講は其の財産田地を開放以来休講しているが、他は何れも古例通り行われている。

『島根町誌』（島根町、三九一―三九二、六八三―六八四、七七二、七七七頁）

盆踊りの歌 佐倉宗五郎口説〈多古2〉

これは過ぎにし その物語 国は下総 印幡の郡 佐倉領にて 岩橋村よ 名主総代 宗五郎というて 心正直 惻愍な者よ このヤ由来を 尋ねて聞けば……尚もうらみの 数重なりて ここに現れ 恨みを晴らす 聞いて殿様 役人はじめ 国の百姓 皆一同に 宗五 魂魄 神にも崇め 思い晴らして 豊作頼む 今は佐倉の 鎮守と祀り 後の世までも 大明神と 国の守りと その名は残る。

社日〔土〕 七、社日さんには土を掘らぬ。つまり、土に響くような仕事をせぬ。仕事をして後戻りする〈全〉。八、土を動かさぬ。「社日仕事は後戻り」といって、田畑へ行かぬ〈大全・加全・多・沖・瀬〉。九、土いじりせぬ〈具・加全・野〉。一〇、土を掘らぬ。しかし、御膳を供えて社日の神様を祝うと縁起が良くなる〈北・野〉。〔野山〕一一、野山の仕事をせぬ。「社日仕事の後戻り」といい、した仕事が無に返るのではないが、外の事で何にもならなかったようになる〈浜・具・多・瀬・井〉。一二、社日に山へ行けば災難あり〈海・浜・柏・大・左・多〉。一三、社日さんには山へ行かぬ。山に行けば山の神様に木の数に数えられる〈楡・浜・具・新・多・沖〉。一四、社日さんに山へ木伐（こ）りに入ると病気になるか、怪我をする。江戸末期に、浅右衛門という人が社日に山へ行って大怪我をしたので、その後「浅右衛門さんの木ま

くり」といって、社日に山へ行くのを戒めた〈野〉。〔仕事〕一五、社日は、土の中にいる虫の供養の日なので、農作業をせぬ〈瀬〉。一六、社月に種蒔きはしない。芽も出ぬ〈野〉。一七、藁仕事をせぬ。藁を打つと地面に響いていけぬ〈野全〉。
↓152、山の神↓38、呪い220

二月

下旬ごろ 春社日 彼岸の中日に最も近い、その前後の戌の日

138、社日様 牡丹餅などを作り、神仏に供える。↓禁忌40 152

八月

下旬ごろ 秋社日 彼岸の中日に最も近い、その前後の戌の日

269、社日様 百姓の神様、ともいい、神仏に御膳↓138 (二月)

梅 原 達 治

『島根町』（関西学院大 一四三頁）

三月

一〇 社日 (旧二月中旬)

今は勤め人が多いので、この仕事を休むことはほとんどないが、昔はこの日に仕事をするときがをしたり、その日の仕事が無駄になると言われたり、土をさわるとけがれるなどと言われた。土地の神、農業の神に対する畏れの風習だと思われる。

秋の社日 (酒井、二〇〇頁)

春同様「土を動かしてはならない」と言う。

大蘆 『郷土調査』 (大蘆)

ヨ地神 (垣の内) 祭神 (祖神)

諸神は宝暦一四年正月の記録 「島根郡大葦裏諸神社並荒神神書付指出帖」に拠る

△九月

其他 秋彼岸、社日 消防演習

八束郡美保関町

森山 『もりやま』 (森山、八一―八二頁)

春の社日 (土祭り)

中日に近い犬の日には土に刃物を当てない、スキやクワを使った田畑の仕事はしない。土を動かしてはいけないと言って仕事を休む。

八束郡東出雲町 『東出雲町誌』 (東出雲町、八七四、八七五、八八七、八八九、八九三頁)

また部落のつきあいの上で、食事を共にするのが楽しみだが、禁忌をともなった講もある。たとえば、「社日さんには土を動かしてならぬ」という禁忌がある。日常の生活に区切りをつけ、田畑仕事の計画を部落の人が寄って相談をする。いわば生活の知恵から生まれたものであろう。揖屋の場合、今は県営住宅になっている辺に、黒松の大樹の陰に自然石の社日碑があった。どこの部落でも春秋の定日に、これに注連をかざって祭場とし、酒肴をここに供え、その年

の豊穰の祈願をこめるとともに、農事について打合わせ、秋にはまたお礼の集いをするのである。

頭屋制 歳徳神まつりに始まって地元にもつられる荒神さんや社日さんの祭事は、頭屋を主役として部落ぐるみで参加しなければならなかった。

頭屋は一戸の「本当」を代表役としてその補佐役として数軒の「協当」が祭事にあたる制度である。

現在もひきつがれているこの頭屋制は、「歳得神祭り」「荒神祭り」で述べるように本当「協当」が、神官のおみくじによって選ばれる例が多い。

治 五反田部落の場合でみると、歳徳神まつりと、総荒神大空神祭り社日に頭屋制が残っている。大正四年の規定では、頭屋は祭礼の前日に崎田鼻の「一つ石」で海水で身をきよめることになっているが、ひところは日本海岸にまで出向いて潔斎行事をしたともいう。社日 三月一九日頃、春の社日で、此の日は畑へ入らない日、土を動かさない日で、この日は野良止めである。九月二四日は秋の社日である。

梅 掛祭りと船神事 八月二八日に行われる揖夜神社の祭事である。

新米をもって神酒を醸し焼米を調製し稲穂を櫛に掛けた稲穂櫛を作って神前に供える。神前には新米の神酒と、三宝に焼米・稲穂も供え祭事が行われる。これは、初穂をもって田の神をまつた古式をつたえるものである。

東出雲町 意東 『意東村史』（伊藤、一四七頁）

社日さんの日には土いじりをしない。

八束郡八雲村熊野 『民育資料 熊野村誌』（岩田、一〇三―一〇四頁）休業日

古来社日祭、荒神祭、大山祭、初午祭、雨乞休、順気休等其他各種の名目の下に休業日を求むるの風習ありしが明治三三年村内矯風規約を設け毎日一日一五日に定日に祝祭日を加へ年中の休業日を一定せしかば当日は一日若くは半日業を休み服装を改め集合往来或は飲食を共にして楽しむを例とす

(春の社日) 菜畑に入ってはならぬ (酒井、一八五頁)

八束郡八雲村熊野 (酒井、二〇〇頁)

(秋の社日) 社日には畑や山へ入らず、田の端に竹の杵を組み、稲穂を一二束刈って掛けることにしている。これらの伝えは、社日さんが農業神や山の神の性格を示しているものといえよう。

八束郡玉湯町 『玉湯町史』 (玉湯町 一七〇頁)

社日

社日さんのお祭りといって、農家の神(土の神)として崇拜する。五穀豊穰を祈りもちをついて供え、この日は農家は土耕や山仕事をしない風習がある。社日は、三月と九月の彼岸の中日に最も近い戊巳(つちのえみ)の日である。

八束郡玉湯町 『布志名誌』 (布志名、二二七―二二八、二二三―二六頁)

社日……農業神

地主神……土地守護神

資料N参照

八束郡八束町

二一『雲陽誌』卷之三 意宇郡 一子（蘆田、一〇六頁）

地神社 瓊々杵尊をまつる、永世七年造立棟札あり、

能義郡広瀬町 『広瀬町史』（広瀬町、三二五頁、三三二頁）

三月一八日社日講 この日は社日社に参詣し又は社日講を催す。農家は一斉に休業し小豆飯をたいて神に供える。この日は田畑の土を動かしてはならないとされている。社日は春分・秋分の前後に近い戊の日で燕は春の社日に来て秋の社日に去るといわれていた。

社日 春分・秋分に近い戊巳の日をいう。春の社日には種をまき、秋の社日には五穀を収穫して神に供えるのである。

梅 原 達 治

能義郡広瀬町

広瀬の社日講は三月一八日で、社日社・祠に参詣して講を催し、小豆飯を神さんに供える。農家はもとより奉行人も仕事を休んだ。

ホカケの風習が社日の日の行事として残っている。（石塚、六二頁）

『比田村誌』 能義郡広瀬町（比田村、一八四頁）

（二月）一八日 社日さん。農家は一せいに休業し、社日さんに参拝し、種粃に水をかける。

東比田

(春の社日) 倉のなかの種俵に水をかける (酒井、一八五頁)
(写真) えびす棚 前につった稲穂は年々の社日の刈ってきてつったもの

能義郡広瀬町東比田 『日本民俗地図』三 (二七七頁)

山上講・観音講・社日講・竜宮講 かつて行われた。

能義郡伯太町 『伯太町史』 (伯太町 三九〇、四〇五頁)

風俗と迷信

四、春秋二期の社日は地神を祭るの日なりとて耕耘は勿論一般に土を動かさざること

三月二十四日 社日 神詣し小宴を開く

九月二〇日

能義郡伯太町井尻 『井尻村史』 (井尻村、一二四―一二五頁)

農作の豊穰を祈る「社日さん」の本格的な形式は五角形或は六角形の石柱に、五穀の神として左の五神号を記したもので、部落の山上などに建ててある。

天照皇太神・大己貴命。少彦名命・倉稻魂命・埴山姫

能義郡伯太町安田 『安田誌』 (安田、七五、七六頁)

年中行事

三月 社日 社日講

九月 二四日 社日 田畑を耕さぬ

能義伯太町安田 『続安田誌』 (宮本、他、二、四頁)

二月

治 達 原 梅
・社日講 此の日は、一日田仕事を休み、社日塚へ詣った。

九月

・社日 農家は稲を数本とり、青竹を曲げて両方の端を地にさし、之に稲を掛けた。社日さまにもこれを供え感謝の意を捧げる。一日中休む。

仁多郡仁多町三沢 『三沢村郷土史』 (三沢村、二五、二六頁)

三月 彼岸社日、休業

三沢神社

撰社

一、社日社 祭神、天照大神、大日貴命、少彦名命、宇賀魂命、埴安命

鹿足郡柿木村法師淵（酒井、一八五頁）

（春の社日）トシコシさんは社日に田の水口（みとぐち）へ出て亥の子に帰る
大根畑に入ってはならぬ

鹿足郡柿木村椈谷（酒井、一八五頁）

（春の社日）トシトコさまは作り神さまだから、三月一七日の社日に神棚に水をあげ、それを種にかけておけば、種はいつ
侵（か）してもかまわない

（春の社日）「この日から神が田に出られるので、闇夜でも足元だけ明るい」とし、種の余ったものは種（たな）焼き米と
いって、粃米のして神に供えて食べた。そのような風習は、この地方で刈り始めのころの焼米に照応する。（酒井、一八五
―一八六頁）

隠岐郡知夫村古海（酒井、一八五頁）

（春の社日）大きな音をさせない

松江市

図三 松江市法吉町の社日（島田、一九三頁）

安来市

山根町の社日さんの石祠には、天照大神・倉稲魂命・埴安媛命・少彦名命・大己貴命の五神を祀り燈明をあげて拝む。

また春の彼岸の社日には亀治市（明治初年に亀治種という稲の品種を発見した広田亀治）が開かれ、農業の豊作を祈る。種子・苗木・農具の市がたち、近郷から農民が集まって賑わう。

図二 安来市山根町の社日（島田、一九三頁）

八束郡

大原郡 『大原郡郷土資料』二（村上、六七、六九頁）

シャニチサン（新暦三月）社日さん。

春は社日さん（作り神）が畝で調べ物をして居られるから、土を動かさぬとて仕事を休んだ。仕事をすると後戻りすると言って、百姓は嚴重にいましめていた。

梅原 達 治
シャニチサン（新暦九月）社日さん。

秋は社日さんが山で調べ物をして居られるから、山仕事をするときだけ後へ戻ると言って山へ入らず仕事を休む。特に鎌を使わぬ。

大原郡大東町 『大東町』（大東町、七九、八二頁）

シャニツチサン（新暦三月）社日さん

春は社日さん（作り神）が畠で調べ物をして居られるから土をうごかさぬとて仕事を休んだ。仕事をすると後戻りすると言って百姓は嚴重にいましめて居た。

シャニツサン（新暦9月）社日さん

秋は社日さんが山で調べ物をして居られるから山仕事をするとかそれだけ後へ戻ると言って山に入らず仕事を休む。特に鎌は使わぬ。

大原郡大東町海潮『海潮村誌』（同村、三四〇、三四二頁）

三月

社日さん（新暦三月）春は社日さん（作り神）が畝で調べものをしておられるから、土を動かしてはいけないというので仕事を休んだ。仕事をするとか後戻りするといつて、百姓は嚴重にいましめていた。

九月

社日さん（新暦九月）秋は社日さんが山で調べ物をしておられるから、山仕事をするとかそれだけ後へ戻るといって山へ入らず仕事を休む。特に鎌を使わぬ。（酒井、二〇〇頁）

『加茂町誌』（九八〇、九九一、九九四頁）

須美弥神社（立原）

境内神社

社日社

天津神社（東谷）

境内神社

社日社

民間信仰

(1) 社日祭 春分、秋分に最も近い戌の日に社日祭を行われている。土の神をまつり町内の各神社あるいは部落内の適当なところに祠を造り五穀守護を祈願している。

『加茂町史考』（中林、下二二五四、一六七、一七八頁）

五、加茂村

チ、社日神社 祭神天照大神大穴持命小彦名命埴安命倉稻魂命であって、即ち五穀の神である。文化年中観請社殿は石祠。

梅 原 達 治

一二、延野村

ハ、社日神社 祭神五穀神、正保三年観請と聞え社殿はない。

一七、南加茂村

イ、貴船神社

ロ、境内社

社日社 祭神 天照大御神 大己貴命 食稻魂命

大原郡木次町芦原 『芦原郷土誌』 (芦原、五四、五五、七六、七七頁)

社日さん

春分、秋分に最も近い戌(つちのえ)の日を社日といい、土の神をはじめ五穀の神々を祀るこの社日さんに御酒と小豆飯を供え参拝者が戴いたという。この日一日土を動かすことを忌み慎しむと言い伝えられている。現在上垣内の上の畑に祀っており、地頭本願は向である。

荒神さん

地神、地主神、山の神のような性格を持ち、また氏神のような性格もあるが激しい性格の神で、木立の中の塚とか樹木に祀られ、祭礼には藁しばにおお藁の小切れを入れ、掛樽に神酒を入れて供え注連をはり弊をたて祭る。

三月〜四月

社日さん(作り神) 春は社日さんが畝で調べ物をしておられるから、土を動かしてはいけないとて仕事を休む。仕事をすると後戻りがするので嚴重にいましめた。

九月

社日さん 秋は社日さんが山で調べをして居られるから山仕事をすると後へ戻るといい、この日山には入らず仕事を休み特に鋤を使わぬ。

簸川郡 斐川町 『斐川町史』 (斐川町、一二〇七頁)

二月

二八日頃社日 山の神の年始日といって山に入らず。

「社日ちあん仕事はあと戻り」といって休み、特に土を動かすことを嫌った。

簸川郡斐川町伊波野『伊波野村誌』（伊波野村、三三七頁）

二月

二八日頃社日、仕事をする「社日さん仕事で後戻りする」といって休む。ことに土を動かすと悪いという。

梅 達 治

簸川郡佐田町『佐田町史』（佐田町、七〇七、七〇八、七二二頁）

原 達 治

三月

社日 春分に一番近い「戊（つちのえ）」の日、この日は土神（耕作の神）の祭日とされている。

「社日仕事の後戻り」という俗諺は、この日に、土をいじるのを忌み休まねばならぬのに、仕事をする者へのからかいと戒の言葉である。家では餅を搗いて祝う。

九月

社日 秋分に日に一番近い戊（いぬ）の日、春の社日と同じ行事

簸川郡多伎町岐久『岐久村誌』（岐久、三三九、三四一頁）

三月

社日 農事を休む日で、仕事をすれば後へ戻るといふ。土をいじってもいけないし、木を植えると枯れるなどともいふ。

九月

社日 農事を休むこと春に同じ。

鹿足郡

吉賀地方

一〇月九日の山の神の日の伝え（秋の社日と比較して）（酒井、二〇〇頁）
山の神に酒とカミシバを供え山へ行かない。「二月九日（春の山の神の日）に山野か身が木を植えられたのを、この日調べて歩かれるから、神に出会ったら放られる」といふ……

文 献

蘆田伊人 一九三〇 『雲陽誌』雄山閣

石塚尊俊 一九七三 『日本の民俗 島根』第一法規

井塚 忠 一九八二 「社日」『島根県・他

伊藤菊之輔 一九八二(再)『意東村誌』東出雲町立意東公民館(島根県)

稲田積造、古瀬美延・編 一九五五『講武村誌』同誌刊行会

岩田瀧三郎 一九二二『民育資料 熊野村誌』熊野村青年会(八束郡八雲村)

海潮村自治協会・編 一九五七『海潮村誌』同会(大原郡大東町)

梅原達治

一、一九八四「北海道の地神塔の儀軌」『札幌大教養紀要』二五

二、一九八五「埼玉県児玉町内の社日塔」『札幌大教養紀要』二七

三、一九八六「千葉県印旛地方の社日塔」『札幌大教養紀要』二八

四、一九八七「地神信仰の地域的変異について」『札幌大教養紀要』三〇

五、一九八八「佐倉地方の社日祭祀」『佐倉市史研究』八

六、一九八八「民間信仰としての社日祭祀の形成」『札幌大教養紀要』三二

七、一九八四「広島県高野町の社日祭祀」『札幌大教養紀要』三四

恵曇村尋常高等小学校、同村水産専修学校・編『郷土研究』同校

大蘆村尋常高等小学校、大蘆村実業公民学校(八束郡) 一九三四『郷土研究』一 同校

大江京筆 一九六八「春秋社日醮儀」、瀧本誠一『日本経済大典』一七 明治文献

大庭良美 一九八二「座頭」、「地神申し」『島根県・他

奥原福市

一、一九三二『島根県秋鹿村誌』下 秋鹿村教育会(現・松江市)

二、一九七三(複製)『八束郡誌』本編 名著出版

片江郷土誌編さん委員会・編 一九六五『片江郷土誌』編纂委(美保関町)

川津郷土誌編修委員会・編 一九八二『川津郷土誌』松江市川津公民館

関西学院大学地理研究会 一九七七(序)『島根(野波・加賀)』同会

岸崎左久治 一九八七(四刷)『田法記』小野武夫『近世地方経済史料』六 吉川弘文館

黒田 正 一九八八『備北の地神祭』『広島民俗』三〇

甲南大学人文地理学研究会 一九七八『島根県八束郡八雲村』『えくねめ』一七

小松原真琴・編『安田編』同公民館(能義郡伯太町)

酒井薫美

一、一九七五『島根県』『鶴藤・他』一

二、一九『出雲・石見伝説散歩』酒井薫美・萩坂 昇『出雲石見の伝説』角川書店

酒井薫美・他

坂田友宏 一九七五『鳥取県』『鶴藤・他』一

島田成矩 一九七九『鳥取県』『鶴藤・他』二

島根県大百科事典編集委員会、山陰中央新報社開発局・編 一九八二『島根県大百科事典』山陰中央社

島根町誌編纂委員会・編 一九八一『島根町誌』島根町教委

島村知章、一九七四『岡山県土俗及奇習』池田弥三郎、他(編)『日本民俗誌大系』三 角川書店

新藤久人 一九七五『広島県』『鶴藤・他』一

須藤吉郎・編 一九四九『古江村誌』 古江中学校（現・松江市）

大東町社会科教育研究郷土資料編輯委員会・編 一九『大東町 郷土の姿』二 同会（大原郡）

玉湯町史下巻（一）編さん委員会・編 一九八二『玉湯町史』下（一） 同町

田宮守正 一九七九『鳥取県』『鶴藤・他 二』

千葉県印旛郡役所・編 一九一三『千葉県印郡誌』上 同役所

津田・古志原郷土執筆専門委員会・編 一九八二『津田・古志原郷土誌』 津田・古志原郷土誌編集委員会（現・松江市）

鶴藤鹿忠

一、一九七五『岡山県』『鶴藤・他 一』

二、一九七九『岡山県』『鶴藤・他 二』

鶴藤鹿忠・他

梅 原 達 治

一、一九七五『中国の歳時習俗』 明玄書房

二、一九七九（二刷）『中国の民間信仰』 明玄書房

土居卓治、佐藤米司 一九七二『日本の民俗』 第一法規

中林季高 一九五六『加茂町史考』（本文篇） 加茂町史考頒布会（島根県大原郡加茂町）

西郡亀一 一九七二『井尻村史』 同村公民館（能義郡伯太町）

伯太町史編さん委員会・編 一九六二『伯太町史』 同町役娑（能義郡）

東津田村（出雲国意宇郡） 一八八八『地誌編輯取調簿』（現・松江市）

東出雲町誌編さん委員会・編 一九七八『東出雲町誌』

斐川町史編纂委員会・編 一九七二『斐川町史』同町教委（簸川郡）

平山敏治郎・校訂 一九六九「諸国風俗問状答」竹内利美、他・編『日本庶民生活史料集成』九 三一書房

広瀬町史編纂委員会・編 一九六九『広瀬町史』下 同町（能義郡）

布志名 寿会 一九八一『布志名誌』布志名を語る仲間（島根県八束郡玉湯村）

藤原寛一 一九七九「広島県」『鶴藤・他 二

文化庁 一九七二『日本民俗地図』三 国土地理協会

文化庁・編

一、一九七七（三版）『日本民俗地図』国土地理協会

二、一九七二『日本民俗地図』三 国土地理協会

松岡利夫

一、一九七五「山口県」『鶴藤・他 一

二、一九七九「山口県」『鶴藤・他 二

松平家編集部 一九一九（再版）『松平不昧伝』慶文堂

宮本市郎右衛門、矢田芳之助、田中 清 一九七六『続安田誌』（能義郡伯太町）

村磯栄俊 一九七六「中国地方の諸藩一覽」『児玉幸多、北見正元監修『新編物語藩史』九 新人物任建社

森山公民館・編 一九八一『もりやま』（創刊号）（八束郡）

安来市誌編さん委員会・編 一九七〇『安来市誌』安来市

山田一郎 一九八二「亀治」『島根県

山根虎之助、岡 正・編 一九五六『あさくみ』 朝酌小学校開校八〇周年記念事業委員会
山本秀市・編 一九三二『幡屋村治績』 同人(大原郡大東町)
横田町誌編纂委員会・編 一九六八『横田町誌』 同会(仁多郡)

『新修島根県史』 通史篇一 一九六九 島根県

『芦原郷土誌』 (大原郡木次町) 一九七七 木次町老人クラブ芦原寿会

『伊波野村誌』 (簸川郡斐川町) 一九五五 伊波野村

『乙立史』 (現・出雲市、一部、簸川郡佐田町) 一九五〇

『上津村誌』 (現・出雲市) 一九五五 簸川郡上津村

『加茂町誌』 (大原郡) 一九八四 加茂町

梅 原 達 治
『岐久村誌』 (簸川郡多伎町) 一九八〇 多岐村

『久多美村誌』 (現・平田市) 一九五四 平田町久多美支所

『佐田町史』 (簸川郡) 一九七六

『島根県仁多郡三澤村郷土史』 (仁多郡仁多町)

『長浜村誌』 (現・出雲市)

『比田村誌』 (能義郡広瀬町) 一九五四 比田村文化協会

『稗原郷土史』 (現・出雲市) 一九八五 稗原自治協会

『平田市誌』 一九六九 平田市教委

『三沢村郷土史』
(仁多郡仁多町)
一九五五

(一九八九年三月二七日受理)